

# 学 位 論 文 の 要 旨

三 重 大 学

所 属	三重大学大学院医学系研究科 甲 生命医科学専攻 臨床医学系講座 産科婦人科学分野	氏 名	萩元 <sup>はぎもと</sup> 美季 <sup>みき</sup>
-----	--	-----	-------------------------------------

主論文の題名

Nationwide survey (Japan) on spontaneous hemoperitoneum in pregnancy

主論文の要旨

本研究は、日本における Spontaneous Hemoperitoneum in Pregnancy (SHiP)の実態を明らかにし、臨床的特性を明らかにすることである。

診療録を用いた後ろ向き観察研究である。総合・地域周産期母子医療センター（407施設）を対象に、2013～2017年（5年間）の期間で SHiP を発症した事例についてアンケート調査を実施した。調査項目は、母体背景、母体予後、新生児予後とし、集められた事例を新生児予後良好群と予後不良群の2群に分け比較・検討した。本研究は三重大学医学部附属病院の医学系研究倫理審査委員会の承認を得ている（承認番号：H2019-151）。

407施設中 267施設（66%）から回答を得て、31症例が登録された。6例（19%）が生殖補助医療での妊娠であった。また、6例（19%）が子宮内膜症を有し、そのうち4例（13%）が生殖補助医療での妊娠であった。母体予後に関しては、原因不明の肝出血により妊産婦死亡を1例（3%）認め、その他の症例は生存し母体後遺症も認められなかった。妊娠中発症の23例中12例（53%）が、胎児機能不全や子宮の頻収縮を認めており、術前に常位胎盤早期剥離と診断されていた。新生児予後に関しては、流産・死産は3例（10%）、新生児仮死は12例（42%）であった。新生児予後良好群、予後不良群における比較の結果、予後不良因子は32週未満の早産（調整オッズ比 6.5, 96%CI:1.05-40.13）、術前の常位胎盤早期剥離の診断（調整オッズ比 35.75, 96%CI:3.46-368.82）であった。また、出血量と新生児予後（臍帯動脈 pH）の間には、有意な相関関係は認めなかった。

日本における SHiP について初めての調査を実施した。母体死亡を認め、高頻度に流産・死産・新生児仮死を認める予後不良な疾患であった。また、約 20%に生殖補助医療、子宮内膜症を背景因子として有していた。子宮内膜症以外の病因などまだ明らかにされていないことも多く、今後の課題である。